段物　牡丹長者　口説き

国はこしない常陸の国よ
牡丹長者の由来を聞けば
裏にゃ泉水築山ついて
馬が七匹、かこぶがやさを
兄の杉信乙若丸よ
いずれの方にも嫁むかいとる
朝日長者の娘御そうな
夕日長者の娘御そうな
元は大事な公家さんなれど
うとろ舟にて早や流さるる
そこのをきては二十日も揺られ
せき太夫さんの拾い子となる
時は正月十一日よ
男(おつ)と方には書き留めなさる
千畳座敷の真ん中ほどに
金の縫針三十五本
それに五色の糸つなぎとめ
云えば弟嫁おとしもつけず
下かがみにとなかるりゃしまい
縫う手を流せ兄嫁二人
そこで兄嫁其の縫い留めは
朝日当たりて消えゆくところ
鹿の聲にてまず縫い留める
同じ座敷の真ん中ほどで
金の縫針三十五本
それに五色の糸つなぎとめ
小鳥止まりてさえずるところ
弓の糸にて早や縫い留める
同じ座敷の真ん中ほどで
金の縫針三十五本
それに五色の糸つなぎとめ
神(しん)と佛を早や縫い留める
母の前にと差し出しければ
長者家とも云われるものが
牡丹長者の先ず物語
八方三階八棟(やつむね)造り
前に千軒長屋を建てて
朝に夜にと曲乗りなさる
すそで三番三郎殿よ
ぢだい兄嫁育ちを聞けば
ぢだい中嫁育ちを聞けば
ぢだい弟嫁(おとよめ)育ちを聞けば
なかにゃほーばんだんしょゆえで
ここのをきては十日も揺られ
揺られ揺られて名はゆり姫と
これが長者の弟嫁そうな
ゆわいびじゃとて大福帳を
女な方には縫い留めなさる
綾と錦の黄色をはえて
こくど針とが七十五本
さあさあ縫わんせ弟嫁さんと
前に流るる大川の水
上が下よと流れて下る
云えば兄嫁其のりにこまる
富士の山にとこをりがかかる
秋のもよをか秋鹿の聲
つぎ中嫁その縫い留めは
綾と錦の赤色はえて
こくど針とが七十五本
千里続いたくれたけ山に
那須の与一が弓引く学び
そこで弟嫁其の縫い留めは
綾と錦の白地をはえて
こくど針とが三十と五本
六十余州の神々様と
あーれ嬉しや縫い留めすんだ
これは兄嫁見事に出来た
溶けて流れてどをたつものか

前の川にと早や流されよ
長者家とも云われるものが
裏の山にと早や捨てなされ
長者家とも云われる家が
長者家でも立たれはすまい
これが長者のみ宝となる

これは中嫁見事に出来た
戦ありてどどーたつものか
これは弟嫁見事に出来た
神と佛との恵みがなけりゃ
桐の箱にと早やなおされよ
千秋万歳まずこれ迄よ